目次

聖語
聖訓摘要……日生上人
大英帝國の盛衰と吾人への教訓……佐藤皐藏
記事
○教報
○寄附團費誌料領收

第三十七年十二月號

聖語

此經をききうくる人は多し　まことに聞き受る如くに大難來れども憶持不忘の人は希なる也　受るはやすく持つはかたしさる間成佛は持にあり　此經を持たん人は難に値ふべしと心得て持つ也　則爲疾得無上佛道は疑ひなし　三世の諸佛の大事たる南無妙法蓮華經を念ずるを持とは云ふ也　經に云く護持佛所屬といへり　天台大師の云く信力の故に受け念力の故に持つ云云　又云く此經は持ち難し若暫くも持つ者は我即ち歡喜す諸佛も亦然なり云云

（四條鈔縮刷一〇九五）

聖訓摘要

日生上人

松野殿御消息

此の娑婆世界の一切衆生は、十方の諸佛に抜き捨てられしを、釋迦一人計りして扶けさせ給ふを唯我一人と申すなり。（縮刷遺文錄一五三六）

これは法華經の「唯だ我れ一人能く救護を爲す」といふ經文の意味を、悲華經の寶海梵志の例に依つて證明せられたのであります。その悲華經に說かれて居ることは、大勢の千人の王子が皆願を立てられた、その中にいろ〳〵の佛もありますけれども、それ等は性質の惡い者は皆斥けられて、例へば阿彌陀如來にしても穢土はいけない我れは淨土を取ると言つて安養淨土を擇つた、穢土の人間といふものはモウ性質の惡い、感化院にでも入れんならぬやうな者ばかりである、さういふ者を引受けることは出來ぬと言つて、大勢の方が願を立つたけれども皆それを排斥した、一番終ひにこの寶海梵志といふのが、そんなに皆が嫌ふならば、皆の手許で撥ね出したその撥ね出し者ばかり集めて、吾輩はそれを一つ教化して見たいといふことを言はれた、その撥ね出し者を集めたのが娑婆世界ぢやと悲華經に說いてある。さ

うしてその婆婆世界に生れた者を釋迦牟尼佛が一人して救ふといふのは、この悲華經の寶海梵志が後の釋迦牟尼佛であるといふことが說いてあるのでありますが、その事を玆に引かれたのであります。この娑婆世界の一切衆生は十方の諸佛に見捨てられて、此奴はいかぬと言つて撥ね出された者である、その撥ね出された淨ばかりを集めて來たのがこの娑婆世界である、それを釋尊は一人して誰の手傳ひも受けないで、その拗け上つた者を俺は必らず救うて見せるといふ大慈大悲を以つて臨まれたのが「唯我一人能爲救護」といふ經文の精神であるといふことを解釋せられた。これは暫く相對的に釋迦と他の佛とを對立して見ての說明であつて、法華經の壽量品に入ればモウこの對立がなくなつて、本佛の活動として一切の者を認める場合には絕對の一人として釋尊を見るのであるが、今の悲華經の場合は相對の上からして、諸佛の撥ね捨てられた者を救うたといふことに於て、釋尊の慈悲の卓越せることを御紹介になつたのであります。

釋尊の慈悲の勝れた意味を見るのに三段の見方があります、それは今のやうに結緣といふ事から見るのと、又事實歷史の上から釋尊が娑婆に出られて居るこの事からして證明して行くのと、モウ一つは本佛といふ事から見るのとの三點である。これが釋迦如來がどの佛にも秀でて居ることを證明して居るので、歷史的に考へた時には、他の一切の佛は釋尊ほど親しく吾々の人生に現はれて來て居らないといふ事實が玆にある、來た方が不親切で、來ない方が親切ぢやといふことはあるまい、だからこれはどうしても來た方が親切ぢやといふことになる。又結緣といふ事から考へても、娑婆世界の衆生と娑婆世界の敎主釋尊といふ者は過去の結緣からいうても實海梵志は娑婆世界を採つて、其處に撥ね出された者を集めるといふやうな結緣關係がある、この點からいうても緣が深いといふことになる。有緣無緣といふ事からいへば、釋尊は有緣の敎主である。娑婆世界の者は有緣の衆生である。歷史的にいへば實現の如來である、本佛として考へれば一切の活動は釋尊より現はれしものといふ事になるから、この本佛觀から來るのと結緣の思想から來るのと歷史的の觀念から來るのとの三點に於て、釋尊の慈悲の卓越といふことが證明される譯である。今玆にはその中の結緣の思想の一端を紹介されたのである。

兵衛志殿女房御書

この中には別段御紹介することはありませぬ。

六郎次郎殿御返事

これも極く簡單なもので、摘出する所はありませぬ。

四信五品鈔

これは經つた御聖訓でありまして、詳細に御紹介すれば長い事でありますが、今は一二要點を申上げやうと思ふ。

現在の四信の初の一念信解と、滅後の五品の第一の初隨喜と、此の二處は一同に百界千如、一念三千の實義、十方三世の諸佛の出門なり。（縮刷遺文錄一五三八）

この四信五品といふのは、法華經を修行する者の信仰の階段を說いたものであつて、信仰に四つの階級がある、五品といふのは「品」は「級」といふことも同じで、信者の等級に五級あるといふ事である之れを「在世の四信」、「滅後の五品」といつて、釋尊の世に御座る時分の行者に就いて四信といふ階級をお立てになり、滅後の行者に就いて五品といふものをお擧げになつたので、この御書の中に、日蓮主義法華經の信仰が決して難行ではない、非常な信仰主義のもので、誰にでも出來る、唯だ信仰に依つて偉大なものが得られるといふ事を說明してあるのであります。その「四信」といふのは何を指すかといへば、第一が「一念信解」といふ、これは法華經の壽量品の直ぐ次の分別功德品に說かれて居ることであるが、一念信解とはどういふ事かといふと、壽量品に解かれたる本佛釋尊の大慈大悲に對し、その本佛の有難い意味合の事を一おもひ「アヽ成る程さういふ譯かな」と精神に感激するのが一念信解といふ事である。「解」といふ字はあるけれどもこれは無くても宜い、一念信として考へて宜しい、それは日蓮聖人が言はれて居る、何故かといふと第二段の行人が「略解言趣」といふので、「本當には判らぬけれども概略壽量品は成る程斯ういふ敎義が說いてあるのだな」といふ、その敎の意味合を領解する者を第二の階級の人といふのである。そこでその方に「解」の字があるから、第一の「解」の字はその方に取られるから、日蓮聖人は「解の一字は後に奪はる」とこの『四信五品鈔』に解釋した。淨土門の人々が、「法華は難かしい〳〵」と言つて喧ましく言ふから、そこで「解」の一字は後に奪はると解釋して、「一念信ならサアどうぢや、それでも難かしいか、それが難かしいといふならお前の方で阿彌陀樣が有難いと思ふのもやはり難かしくはないか」といふやうに論ぜられたものである、お經文もその精神になつて居る。それから第三は「廣爲他說」と申して、廣く他の爲めに法を說く位地の人である、例へば斯ういふ話を聽いて歸つて、十分領解し又その書物も見て、「一つ日蓮主義宣傳の爲めに自分も話をして見やう」といふので、或は自分の友達を集めるとか、或は店員を集めるとかして、本當にはやれんけれども幾分なりとも話をして見やうといふやうな人。日蓮主義の在家者には段々日蓮主義宣傳の爲めに講壇に立つ人がありますが、山田三良君であるとか、佐藤鐵太郎君であるとかいふやうな人は、先づ第三の廣爲他說の中に入つて居る人と言つて宜いのである。それから第四の行人は「深信觀成」の人といふのである。深信觀成とはどういふ事か、深いといふ字が書いてあるから何か特別の難かしい所に入り込むのかと思はれるけれども、さうではない、この「深」といふ字は「眞心」と佛敎では解釋して居るのである、心の底から出て來るので、何も特別の難かしい事をやるのではない、皮相から出て唯だ一と通り有難いといふのは咽喉の邊から出て來る、それではいけない、如何にも有難いと心の底から思へばそれが深信といふことになる、深いといふ字が書いてあるからといつて、面倒な事をほゞくつて面倒な學問をするの

ではない「あの人は信仰の深い人ぢや」といふ、それが深信といふ事である。觀成といふのはどうかといふと、これは觀念や理窟ではない、分別功德品に說いてあるのは、本佛の實在をハッキリ意識して、眼を瞑つて考へれば本佛は何時も常住にお居でなされる、今も一切衆生を救ふべく活動をなさつて居るものであるといふ事をハッキリ心に認めれば、それが觀成といふことになる。であるからこれは出來ぬ事ではない、諸君の中に於ても信心の深い、本當の精神から出てさうして本佛の實在を意識して居る人は段々あるだらうと思ふ、深信觀成の人もあると私は信ずる、これが即ち四信の行人といふのである。それから滅後の五品の方は意味が少し違つて、第一が「初隨喜」といふ、「初」といふ字は後の位に對して入口であるから言ふので、唯だ隨喜の行人といつても宜い。隨喜とはどういふことかといふと、壽量品に說いてある敎の方に精神が隨つて行く、成る程さういふ譯か、吾々凡夫の精神からは佛の實在といふことも判らず、釋尊の大慈悲といふことも判らぬ、毎に自から是の念を作すと仰しやつてもそんな事は一向心に響かなかつたけれども、段々壽量品の敎を聽き、日蓮聖人の御書に依つて考へて見るとさういふ譯であつたかな」といふので、壽量品の敎の方に心が隨つて行つて「アヽさうか、如何にも有難い事だ」といふ喜びの精神が起る、之れを隨喜といふ、宗敎感情の最も幼稚な所をいふのである。何も難かしい事は無い、「アヽさういふ譯かな」と思つて「有難い」と思つたならば、必らず其處には敎があつて、その敎の精神に隨つて喜んで居る譯であるから、それを隨喜といふのである。隨喜贊成と能く言ふでせう、「別に力を盡すことも出來ぬけれども、マア僕は兎に角名前だけ書いて置かう、隨喜贊成の一人にならう」と言ふ、極く簡單な贊成である。それから第二は「讀誦の行人」といつて、法華經を讀むことである、即ち壽量品を讀んで「自我得佛來、所經諸劫數」と讀む、お經を見て讀むのが讀誦であり、誦は諳誦であつて、段々熟達してお經の本を持たないで誦めるやうになる、これが讀誦の行人である。諸君は大抵みなさうでせう、お經の本など持たないでも「自我得佛來」から「速成就佛身」まで行く譯であるから、それは第二の行人である。それから第三は「敎化說法」と言つて、他の爲めに壽量品の意味合を說いて聽かす所の行人である。それから第四は「兼行六度」と言つて、本當にはやれないが—兼行といふのはマア副業といふ位のもので、本格にはやれないといふことである。六度の行といへば布施持戒、忍辱、精進、一心、智慧であるから、施しも少しはやる、戒律も本當にはやれぬけれども成べく惡い事をせぬやうに、布施も思ひ切つてはせぬけれども、十錢の中から五厘位は賽錢を出すといふやうな譯で、本格には行かぬけれども兼行である。忍辱といふことも成るべく腹を立てぬやうにする、この間も或る人が來て言うて居つたが、大阪の人で元日早々何か腹を立てゝ汽車に乘つて東京に飛出して來たけれども、又考へて「どうも元日早々腹を立てゝ居るのも宜くない」といふので途中で思ひ返したといふ、これ等もやはり忍辱の人で、「どうも信心する者が元日から無闇に腹を立てゝ女房の頭を叩つたりしてはいかぬ」といふやうになつて來る。それから精進といふことは働くのであるから、ノラクラして

居つてはいかぬ、一心といふことは精神が何時もフラ〳〵して居つてはいかぬから、沈着いた精神にならなければならぬ、智慧といふことも物の筋道が判らぬやうな事ではいかぬといふやうに、その一部分々々々は皆やれるからそれを兼行の六度といふのである。そんな事は皆難かしいと言つて捨てゝしまへば、何時まで經つても元の杢阿彌になつてしまふから、少しでも腹を立てぬやうに、少しでも奮勵努力するやうにといつて啓發して行くのを兼行といふ。お釋迦樣の精神は斯ういふやうな事に就て非常に能く分けてあるので、「少分」と言つて少しでも宜いと言はれて居る、少分の菩薩行といふことがある、それからモツと細かに分けると、「微分」と言つて極く少しでも宜いといふ、それからマア段々善くなつて「一分」、「多分」それから「全分」といふやうな譯で、斯ういふ事を非常に詳しく說いてある。それは何を意味するかというと、少しでも宜いからやれといふのである、今まで女房の頭を三遍叩き居つたが二遍になつても宜い、今度は一遍になれば尙ほ善い、それから一度に三つ叩き居つたのが一つになつたとか、月に三遍怒つて居つたのを二遍にしたといふのでも宜いから、少し宛でもやれといふ。そこが大事な所である。そんな事はやれぬといつて畫つて進まないといふことになると、孟子が言ふ通り「能はざるにあらず、爲さゞるなり」で、出來ないことはないのを自ら畫つて進まない、此處から向ふへは行けないと言つて、催眠術でもかけられたやうに線を引いて止つてしまつたならば、人間といふ者は進むことは出來ない、何處までも啓發してその者の進み行くやうにするのが敎の本領といふものである。そ

れが釋尊の精神であるから、さう無闇に難行々々と言つてこれにけちをつけるといふことは、孔子の所謂「畫つて進まざる者」で極く惡い事である、出來ない事でも助けるといふことが一方にあるけれども成るべくは自分の力で行けといふのである。親が子供を引立てるのでもその通りである、息子に商賣をさせるのに、愈々となれば「ナーニ息子はあんな馬鹿野郎でも、この株券とこの貸家があれば食つては行けるけれども、併しこれを餘り早く知らせると馬鹿の上に益々馬鹿になるから」といふので「お前些つとでもやつて見い」と言つて勵まして商賣をさせる。漸く月に十五圓しか儲からない、生活は百圓もかゝる、「それぢやア八十五圓足らぬぢやないか、マア仕方がない、モウ少し勉强して儲けなければいかん」といふやうに、段々に導いて二十圓が二十五圓となり三十圓となるやうに、少しづゝでも儲けて行く方が宜い斯ういふ工合にして親は子供の爲めに圖つてやつて行くだらう。それを「ナーニ十五圓や二十圓の端金ナンゾ儲けないでも宜い、本當をいへば此處に株券が何萬圓ある。あすこの貸家が何萬圓はある、之れを遺るんだ」と始めから言つてしまつたならば、その息子といふ者は益々惰け者になつてしまふ。どつちが一體親の慈悲であるか、さういふ風に唯だ無能力に、無闇に安心を與へることが親の本當の親切であらうか。否、幾分でも能力を發揮させて行くのが親の親切であるかといふことを考へなければならぬ。釋迦如來は斯樣にして能力の發揮といふことをお圖りになつた、それが兼行六度といふことである。さういふ事も知らないで淨土門から「難行だ」ナンと言つてけちをつけられると、直ぐに

「さうだ」と思つてしまふ、日本人には惡い癖がついて居る。それから第六には「正行六度」で、今度はそれが本格にやれる位にまで進んで行くといふのである。

この四つの事と五つの事は孰れもさう難かしい事ではない、けれども今茲に日蓮聖人は四信の一番初めの「一念信解」と、五品の一番初めの「初隨喜」とを取つて、法華行者の安心立命を敎へられたのが茲に摘出した文章である。法華經の修行といふものを難かしい〳〵と言つてけちをつけたから、それを日蓮聖人が辨駁せられた譯である。現在の四信の初めの一念信解と、滅後の五品の第一の初隨喜、この二つは一同に百界千如、一念三千の寶篋である。これは一念信解も初隨喜も、唯だ名前が違ふだけで大體同じものである、この壽量品の敎に對して簡單なる「有難い」と思ふその中に一念三千の意味が含まれて居る、「寶篋」といふのは、一念三千を理窟で研究すれば洵に面倒なやうであるけれども、段々一念三千の義理を推し究めて行けば、この信心の一つに入つて居るから、之れを寶篋と日蓮聖人が言つたのである、この「ひとおもひ」の有難いといふその中に、一念三千の寶も何もかも皆包んである。之れを『觀心本尊鈔』の結文には「一念三千を識らざる者には佛大慈悲を起して、妙法五字の袋の内に此の珠を裹みて、末代幼稚の頸に懸けさしめ給ふ」と言はれて居る。一念三千を唯だ智力的に面倒にのみ考へずして、その大眞理、廣大無邊なる意味合が有難いと思ふこの精神の中にこつそり入つてしまふといふことが「一念三千の寶篋」といふことである。さうして「十方三世の諸佛の出世の門なり」で、あらゆる佛樣はこの信心の中から生れ出た者であるから、十方三世の如來の生れて出られた門口は此處であるそれ故に法華行者の大切にするのは、壽量品に對する所の一念信、初隨喜、此處さへ守つたならばそれで成佛は間違ひなく出來るといふことをお說きになつたのであります。少しも難かしいことはない、ひと念ひの「有難い」といふ信仰の中に一切の功德が成就する、一念三千の廣大無邊の觀念の功德もその中に收まり、十方の佛が成佛したるその出生の門もこの信心の中からである。

さうして是れに尙ほ說明を加へて、「法華經は善いお經だけれども吾々には合はぬ、猫に小判だ」といふやうなことを淨土門が言ふけれども、譬といふものは、人を誤魔化すに非常に都合の好いものである猫に小判ナンといふことに譬へて來るから間違ふ、最上の經は劣機を救ふ、高山の水は幽谷に下る」と解釋をせられた此の譬諭を持つて來たら宜い、猫に小判などを持つて來るからいけない。高い山の上の水は高いからといつて下に降りないといふことは無い。高い山の上の水が流れて、どんな低い所でもどんな隙間の所までも皆行くのである、その通りに法華經の高い完全な敎が、どんな劣つた者でも救ふといふことになつて行くのである、宗敎といふものはそれでなければならぬ。例へば病氣になつたとしたならば、あの醫者は餘り良いお醫者さんだから迚も吾々の病氣は癒して呉れまいといふやうなことはないだらう「吾々のやうな病氣は迚も醫者に見せても癒して呉れないだらうから、賣藥で間に合せて置いたら宜からう」——そんな馬鹿な話はない。宗敎といふものは最高完全を理想とするものである。それ

は今日の宗教學の上に於て考察すれば、宗教といふものは一番完全なものを理想として居るものである世間の生活に於ては如何に貧乏な者であつても、宗教の信仰の上に於ては最高絶對のものと握手することが出來るといふのが宗教ではないか、それを何處までも遠慮して貧乏根性がついて廻つて、「世間でも貧乏なら宗教でも貧乏扱ひをされるだらう」――そんな事は宗教に於てはありはしない、それは非常な間違つた觀念である。この物質界には種々ある階級があるけれども、信仰の門に入つたならば貧富貴賤等の總ての階級を滅して、人間の賢い愚か位のことは超越して、絶對のものに一致するといふ、茲に宗教といふものはあるのである。然るに宗教の上に迄、愚かな者に與へた宗教、賢い者に與へた宗教、貧乏人の宗教、金持の宗教といふやうな區別を立てやうとする、そんな事はありはせぬ。宗教に於ては一切の者を等しく救ふものである。であるからその意味を「高山の水は幽谷に下り、最上の經は劣機を救ふ」と解釋されたのである、その事を『四信五品鈔』に詳しくお示しになつて居る。

天子の襁褓に纏はれ、大龍の始めて生ずるが如し。蔑如すること勿れ蔑如すること勿れ。（縮刷遺文錄一五四三）

これは何を仰しやつたのかといふと、法華經の開經に出て居る譬喩でありますが、「天子の襁褓に纏はれ」といふのは、天子樣のお子がお生れになつてまだ小さいものであるから、襁褓の中に纏はれてオギャア〳〵と泣いてござる、それは政治を執ることも出來なければ學問も出來なければ何も出來ない、唯だオギャア〳〵と泣いて居るだけであるけれども、嵐が天子樣のお子であるから、その御側に行つたら

どんな偉い學者と雖も、そのオギャア〳〵と泣いて居る子供の前に頭を下げなければならぬ、法華經の行者亦以つて斯の如しと日蓮は言ふのである。一念信の行者、初隨喜の行人は、生れたばかりのオギャア〳〵と泣いて居る子供であるかも知らんけれども、嵐が本佛を信じて、將來佛と成るべき者である。「大龍の始めて生ずるが如し」で、生れたばかりの龍の子であるから、ヒョロ〳〵して居つて、まだ自分で働くことも出來ないやうだけれども、大きな三尺四尺の蛇と雖も、蛇は何時まで經つても蛇である、こつちは龍の子であるが故に、七日を出でずして天に昇つて雲を呼び雨を降らすやうな作用がある生れたばかりの所では蛇にも及ばぬやうであるけれども、數日の後を見よといふのが「大龍始めて生ずる」といふ事である。斯樣にして法華經の行人の位は低しと雖も、その功德の廣大なることを現はし、或は又他の譬喩を擧げて、「好堅は地に處して芽己に百圍」と言つて、好堅といふ木は、まだ土の上に出ない中からその芽が非常に大きくて、百圍といふから百抱へもあるやうな芽を持つて居る。又「頻伽殼に處して聲衆鳥に秀づ」と言つて、迦陵頻伽といふ鳥がありますが、その鳥は殼の中に居つて未だピー〳〵啼いて居るけれども、ひと度これがパッと割れて出て來たならば、一切の鳥の及ばぬやうな佳い聲をして啼くものである、今法華の行者、一念信の行者といふ者は、迦陵頻伽が卵殼の中でピー〳〵と啼いて居るやうなものである、その場合には鷄にも及ばぬと思はれるかも知らんけれども、今に殼を破つて出た時を見よといふのである。斯の如くに法華經の行淺くして功の多きことを論ぜられた、修行は何に

もさう難かしい事はない、けれども功德は廣大無邊であるといふ行淺功深といふ事を說かれたのであります、それが『四信五品鈔』の精神である。これは全文に亘つて詳細に研究する必要がありますけれども、今は摘要の場合でありますから簡單に御紹介をして置くのであります、實は「聖訓要義」の中に全文を御紹介してもよい程な御書でありますけれども專門の事に屬するものでありますから略したのであります。

寄附團費誌料領收（自十月二十一日至十一月二十日）

一金貳圓貳拾錢也　東京　岸野　壽右衛門殿
一金貳圓四拾錢也　同　内木なつ殿
一金六拾錢也　同　長澤信一殿
一金五圓也　同　小峰豊子殿
一金壹圓貳拾錢也　同　原木彌三郎殿
一金參圓也　千葉縣　藤崎喜三郎殿
一金貳圓貳拾錢也　岡山縣　樋原荒治殿
一金壹圓貳拾錢也　萩縣　末永傳七殿
一金貳圓貳拾錢也　愛知縣　藤平惣助殿
一金壹圓也　青森　柏木吾市殿
一金貳圓貳拾錢也　横濱　西村喜勢殿
一金壹圓貳拾錢也　萩　村田よし子殿
一金七拾錢也　山形縣　村川源次郎殿
一金貳圓貳拾錢也　神奈川縣　山北求道院殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　金指龜吉殿
一金壹圓貳拾錢也　神戸　倉藤喜一郎殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　石川顯隆殿
一金壹圓貳拾錢也　千葉　山中保榮殿
一金八拾貳錢也　大阪　瀧川事完殿
一金貳圓也　山形縣　長澤辨太殿
一金貳圓也　東京　大原行道殿
一金壹圓貳拾錢也　愛知縣　中村新次郎殿
一金參圓五拾錢也　東京　菊地峰三殿
一金貳圓貳拾錢也　同　安藤佐七殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　木野榮殿
右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計

新團員加盟

宮城縣白石町本町　尾形多喜男氏
千葉市寒川三五〇（中村美津氏御紹介）　山中保榮氏
山口縣萩市吉田町　末永傳七氏
同　村田よし子氏
（小高與吉氏御紹介）

大英帝國の盛衰と吾人への敎訓

海軍中將　佐藤皐藏

緒言

諸君の御承知の通り、我國は今日非常な難局に立つて居るのであります、此の難局を有利に打開しますれば非常に國が榮えるのでありますが、若しも此の難局に耐え得ないやうな日本國民であつたならば國は必ず衰へてしまふのであります。そこで私は、我國と多くの點に於て非常に相似て居るところの英國に例をとりまして、我が國民は如何に考へたら宜からうかといふことを。私の平素考へて居る所に就て少しくお話を致さうと思ふのであります。

日本と英國

英國と我國とは非常によく似て居る點が多いのであります。例へば、英國は歐羅巴の西の外れに在るところの島國であり、日本は亞細亞の東に在るところの島國でありさうしてどちらの國も、自分の國で產出する物資だけを以て國民生活を維持して行くことは出來ない、所謂自給自足の出來ないといふ事は兩方とも相似て居ります。又これに住んで居る國民が、人間として優秀な人々が住んで居るといふ點も似て居ります。其の他いろ〳〵算へ立てると澤山ありますが、兎に角よく似て居る國であります。ところが似て居らない重要なる點が一つある、それは何であるかといへば、英吉利は昔から度々他の國から攻擊をせられ、征服をせられ、さうして奴隷のやうな境遇に陷つた事がありますけれども、日本は決してそんな事はない、昔から未だ曾て他の國から征服

をせられたとかいふやうな歴史は有つて居らないのであります。

それでは何故に日本が左樣に他の國から攻略をせられたりした歴史が無いかといふ事を考へて見るならば、これも理由は色々ありませう。日本の國は非常に立派な皇室を戴いて國體が世界に冠絶して居る斯ういふ國は世界中に他には決して無いのであります。それで國礎も安定して居る、底力がある、斯ういふ點が大なる理由でありませうが、それと同時に吾々がどうしても忘れることが出來ないのは、英吉利と日本とは環境に非常な違ひがある。英吉利は歐羅巴の攻擊精神に富んだ、非常に猛烈な强い民族に依つて圍まれて居りますが之に反して日本は、比較的弱い、平和なる民族に依つて圍まれて居るといふことを、吾々は看過することは出來ないのであります。若しも日本が英吉利の如くに、隣邦に强い民族を有つて居つたとしましたならば、日本と雖も決して斯樣に安泰ではなかつたに違ひない。まさか日本は英吉利などのやうに國が滅ぼされたりするやうな事はなかつたでありませうけれども、屢々攻擊を受けて、種々なる慘害を受けた事があつたに違ひないと思ふのであります。これは特に說明するまでもなく、元寇に就て考へればよく判るのでありまして、彼の忽必烈のやうな者が屢々亞細亞の大陸に出て來たとしますれば、假令日本が征服せられないまでも、必ず時々は攻擊せられた事があつたであらうと思はれるのであります。即ち重ねて申しますが、日本は幸にも平和なる民族から圍まれて居つた結果として、さういふ目に遭はなかつたのだといふ事は吾々は忘れてはならないのであります。

併しながら今日の文明は、世界の距離を非常に短縮せしめて居ります、單に地理的の距離が近いとか遠いとかいふ事は、昔のやうに大きな問題ではなくなつた。今日は浦潮斯德あたりからは、少し遠い船ならば一晝夜で、北海道にも來ることが出來れば、又新潟や敦賀方面にも來ることが出來、馬關海峽の方面にも來ることが出來るといふやうに、まことに近くなつて居ります。殊に飛行機ならば數時間でやつて來られるといふ樣なことになつて居ります亞米利加のやうな國にしましたところで、其の海軍前進根據地である布哇からは、遠い船ならば一週間で來られます、又此の頃は飛行機を運ぶ航空母艦といふものがありまして、これが飛行機を積んでやつて來て、日本に對して攻擊をすることも出來るといふ譯でありますから、日本の直ぐ近所に攻擊的の國が無いから安心だといふやうなことは、決して言つて居られないのであります。

それでありますから吾々はどうしても茲に充分なる武力を有つて居らなければならない。若し武力が無いとしましたならば、日本の國は非常に危いのであります。武力を備へるためには非常な金が要りますけれどもそれ位の事は日本國民が覺悟して居らなければならない。若し日本に相當なる武力が無かつたとしましたならば、日本は今日のやうな威嚴を示す事が出來ないのみならず繁榮を來すことも出來ないのであります。今度の滿洲事變に就て見ましても若し日本に相當な武力が無かつたならば、滿洲方面に於てどんな亂暴な事を支那人からされても、之に手を出すことは出來なかつたでありませう、今日の如く日本が敢然として暴戾なる張學良の軍閥を倒して、正當なる權益擁護の爲に着々としてやつて居るといふ事は、日本に武力があるからであります。又國際聯盟あたりがいろ〳〵喙を容れますけれども、彼等の言ふ事を意に介しないで、敢然として我國の所信を貫いて行かうといふのも、日本に武力があるからであります。斯ういふ點を吾々は考へなければならない。ナニも私が軍人であるから、要らない兵力を養つて置けといふことを申すのではありま

せんが、兎に角吾々は充分なる武力を有たなければ自分の正しい主張を通すことが出來ないのであります。から吾々は何も武力を楯に取つて不正な事をする考などは毫頭ないけれども、正しい事を通す爲にはやはり力を要するものであるといふことを、覺悟して居らなければならないのであります。

英國の興隆と海軍力

英吉利興隆時代の歴史に就て少しくお話しますと今も申したやうに英吉利は度々他の國から征服せられたりした歴史を有つて居るのでありますが、彼の國は、今日こそ非常な大きな國になつて居りますけれども往昔は本國は面積小さく、人口もあまり多くなかつたのでありますから、國を護るためには、自分の領地内に敵の大軍を上陸せしめたならば、到底之を防ぐことは出來ない、どうしても敵を上陸せしめないやうに海軍の力を以て之を喰止めなければ國防を完うすることは出來ない、即ち英吉利は大なる海軍力を要するのでありますが此の事に割合にはやく英吉利人は目が覺めたものはよく國防を全ふしたるのみならず今日のやうな大を成した重なる原因をなして居るのであります。之に就て英吉利人の決心といふものは大したものでありました、エリザベス女王――これは英吉利の今日の繁榮の基礎を築いたところの劃時代的の帝王でありますが、其の時代の名將にウォルター・ラレーといふ人がありまして、其の人が

『海洋を支配するものは世界の貿易を支配する、世界の貿易を支配するものは世界の富、即ち全世界を支配する、であるから英吉利は海洋を支配するだけの大きな海軍力を養はなければならない。』

といふ事を申して居ります。爾來これが英吉利の國防の根本方針になつて居るのでありまして、それから誰言ふとなく英吉利では斯ういふ言葉が起つて居

ります。

『英國の海軍はすべての中の總てである』

これは日本語に直譯したので原語の意味は充分寫らないが非常に強い言葉で要するに大切なものは海軍以外には無いといふやうに言つて居るのでありまして、これは英國々防の標語になつて居るのであります。

さうして英吉利の國防の大方針といふものはどういふ所に目標を置いて居るかといふと、「英吉利の國防線は敵國の海岸に在る」といふのであります。自分の國の海岸に敵を寄せつけて之を衛るのではない、敵の海岸が即ち自分の國の國防線であるといふのであります。これは碎いて言へばどういふ事になるかといふと、敵の海軍などは海洋に出さない、敵の港へ封鎖してしまふ、若し出て來たならば之を撃滅してしまふ、さういふ風にして海上の交通を安全にして、自分の國の船舶、軍艦でも商船でも漁船でも何でも海上を横行闊歩する、敵國の軍艦は申すに及ばず、商船でも何でも海洋に出ることは出來ないやうにする、これが英吉利の國防の方針であるといふのであります、なんと雄大なる方針でありませんか。

斯ういふやうにしてエリザベス女王時代から後といふものは、英吉利は非常に強い海軍を備へ戰がある度毎に海上權を掌握して他の國の海外の領地を取つてしまひ、又探險隊を出しては、まだ所有者の定まつて居らない離れた未開の地などを占領してしまふといふやうな事をして、今日のやうな大きな帝國を形成つたのであります。これは誰も言ふ言葉でありますが、英吉利の領地からは太陽は隱れん坊をすることは出來ないといふ、一箇所で日が暮れても、他の方の領地では太陽が照つて居る、一つの所が夜になれば一つの所は晝だといふやうな工合に、世界中到る處に英吉利の領地はあるのであります。斯う

いふ大帝國を造り上げたといふのは、海軍の力が非常に與つて居るのであります。

英國の國民性

斯う申しますと、如何にも英吉利はたゞ海軍の力を以て領地を擴げ、大帝國になつたといふやうでありますけれども、それはホンの楯の半面でありますモウ一つの反對の半面が吾々としては非常に參考になるのでありますから、之を私は簡單にお話をして見ようと思ふのであります。英吉利が全世界に亘つてあのやうな繁榮を來した其の最も大なる要素を成して居るものは、英吉利の國民性であります。

私が申す迄もなく皆さん御承知の通りに、英吉利の國民性は非常に勇敢であります。探險好きであります、さうして非常に辛抱强いのであります。若しも彼等が斯ういふやうな立派な素質を有つて居らなかつたものとすれば、如何に海軍の力を以て他國の植民地を奪取したからといつても、これを保つことは出來ませぬ。第一に勇敢でなければ、進んで國外に出て行くといふやうな考は起さない。また探險好きの國民でなければ、海外へ行つて未開の地を拓かうといふやうな事業も出來ない。さうして辛抱が强くなければ、さういふ所へ行つても永持をしない斯ういふことになりますから今擧げたやうな三つの素質といふものは、大帝國を造り上げる爲には非常に大事なものであります。

ところで之に比べて見たならば日本人はどうでありませうか。第一に勇敢といふ點に至つては、日本人は或は彼等に讓らないかも知れませんけれども、不幸にして日本人は英吉利人の如く探險好きではない、此の素質に於て缺けて居るやうであります。また辛抱强こと即ち忍耐力といふ點に至つては、情けないほど日本人は劣つて居ります。吾々日本國民は將來此の小さい島國の内に蟄息することは出來ないどうしても大きく世界的に發展しなければならないのでありますから、それには國民教育の上に於て、またお互の心懸の上に於て、どうしても探險の嗜好を鼓吹し又忍耐力を養ふといふ事は、將來の日本人に取つて非常な大事なことであります。

科學的發明

英吉利は科學的發明の先進國として非常に繁榮したことは私が茲に說明する迄もなく皆樣が承知して居られる所であります。そうなつた原因としては勿論英吉利人中には個人として研究心に富み、堅忍不拔よく發明を成就せしめた人の多くあつたといふことは與つて最も力あることは申す迄もないことでありますが、一般社會の人々は大に此の如き事業に關心を有し、亦之を補護奬勵する公私の施設の行屆て居る點も大に與かつて居るのであります。之に比較すると我國は非常に劣つて居る樣であります。個人としては研究心に富んで居る人はない譯でもありますまいが、一般の人々は發明事業に大なる關心を有つて居るとは思はれません、又之を補護奬勵する公私の施設の如きは甚だ貧弱なる樣に思はれます。吾人は大に反省を要することゝ考へます。

日英佛移住民の特色

英吉利人は、移住した土地に於ける風儀が非常によろしいのであります。これも吾々は非常に羨やましい。よく歐羅巴人が申すことでありますが、佛蘭西人の移住地に行つて先つ出來るものは何であるかといへばカッフェーである。之は餘談でありますがチョット申して見ますと、佛蘭西のカッフェーといふものは——佛蘭西のみならず歐羅巴あたりのカッフェーといふものは、日本のカッフェーとは全然違ひます。まアカッフェーといへば佛蘭西が本場でありますが、其のカッフェーといふものは丁度東京の昔の氷店、或は田舍の腰掛茶屋といふ風なものであります。往來からよく見える所にありまして、其の内に坐つて巴里人などは往來を見ながらエックリと

コーヒーを飲んで樂んで居る、さういふのが佛蘭西のカッフェーであります。日本のは狹苦しい閉ぢ籠めた室内に入つて、變な電燈を點けたりしてやつて居る、これが日本のカッフェーで、全然違ひます。それは餘談でありますが、兎に角佛蘭西人の殖民地移住地には先づカッフェーが出來ると謂ひます、ところが英吉利人の移住地にはどういふものが出來るかといふと、先づ出來るものは運動場、それから教會といふやうなものであります。即ち英吉利人は運動場へ行つて身體を鍛へ精神を爽快にする、それから教會に行つては精神の修養をなし、信仰心を維持振興するといふ樣な風でありまして殖民地に先づ出來るものは運動場と教會である。運動場や教會を中心とてし彼等の間に愉快な社會をつくるといふ狀態であります、これは吾々は非常に羨やましい事だと思つて居るのであります。

然らば日本人の移住地に持つて行つて先づ第一にどういふものが出來るか、これは諸君もお考へになつたらスグ判るだらうと思ふ。日本人の移住地に行くと、先づ出來るものは小さな飲食店であります。さうして其處にはキット曖昧な婦人などが行つて居ります。まことに情けない狀態である。これでは健實な、立派な殖民地が出來る譯がないと思ひます。此く考へたならば英吉利人が立派な殖民地をつくりさうして海外に行つて立派な生活を營むことが出來るのは、決して偶然ではない、斯ういふ點も吾々は大いに考へなければならないと思ふのであります。

英國の宗教的教育

それから興隆時代の英吉利に非常に宗教の教育が盛んであつたのであります。其影響は今日と雖もいくらか遺つて居ります、尤も今日は形式のみが遺つて、精神が大分衰へて居るやうでありますけれども兎に角宗教教育は我國とは大に異つたものがある。御承知の通り英吉利人は——これは英吉利人に限つた譯ではありません歐米諸國は大抵そうであります

が生れゝばクリスチャン・ネームといつて基督教に因んだ名前を附ける、これはお寺の坊さんが附けて呉れる。それから子供にはお寺に行くことを非常に奬勵致します、又今日でも其の風が大體維持されてありますが彼の地に於ける日曜日といふものが日本あたりとは大變違ふ、日本でも日曜日には役所や學校などは休むのでありますけれども、それは遊ぶ日になつて居つて、芝居や活動寫眞館等が繁昌する、又スポーツなども盛んにやつて居るといふ風でありますが、英吉利ではさういふ事は全然しない、日曜日はお寺に行く日、お寺に行かない人は家に居つて精神の修養をする日といふことになつて居る。それであるから英吉利へ行つて御覽なさい、日曜日にスポーツなどをして居る者は一人もない、又芝居や活動寫眞といふものは絶對にやつて居はしない。さうして成るべく戸外などを出歩かないやうな立前にして居るから、汽車や電車なども日曜日は平生の日よりも運轉回數を少くして、非常に不便利になつて居る、郵便や電報の配達なども大變減じます。つまり日曜日は遊ぶ日でなく家の内に引込んで精神の修養をするといふ建前になつて居るのであります。斯んな點に於て、日本人が何も形式的に其の通りやらなければならないといふ譯はありませんけれども、ナニか精神の修養に沒頭する日を設ける必要がある事を、私は特に痛感する譯であります。

國民的教訓

私は大變英吉利かぶれのやうな事を申すやうでありますけれども、さうではない、今は英吉利の興隆時代の事をお話して居るのでありまして、後にはだん〳〵英吉利の工合の惡い點もお話をしますから其積で御聞きを願ひます。

英吉利人が子供の時分から深く注ぎ込れて居る教訓の中で非常に私は氣に入つた事がある、これは是

非皆さんも覺えて置いて、子供達に敎へて戴きたい

それはどういふ事かといふと、

『鳥の眼をもつた者は大國民になれる、蟲の眼をもつた者は大國民になれない。』

といふのです。これ丈ではチョット意味が御判りにならないかも知れませんから一寸說明致します、鳥はどんな眼を持つて居るかといつたならば、高い所から下を瞰下しますから何でも綺麗に見える、東京のやうな大きな街を上から見ると、大廈高樓が櫛比して非常に莊嚴に見える、山や川や谷などのある所を見ると、山水の景色が非常に明媚に見える。また田舍などへ行つて汚ない小屋があつたりするやうな所も、高い所から見るとあまり汚ない所は見えないで、やはり風雅に見えるといふ譯で、何でも綺麗に見えるのであります。之を人生に持つて來たならばどうでありませうか、人間を高所大所から見て其の美點を見る、人の良い所を見る、さうして互に親しみ合ひ、信用し合ふといふことになりますから、人間同士の親しみが出來る譯であります。親しみが出來ると愉快に仕事をすることが出來、信賴し合へば責任を感するといふ風で、面白い社會も出來れば、立派な仕事も出來る譯であります。斯ういふ人々が集まつて國家を造つたならば、立派な大國家が出來るのは當然のことであります。然るに蟲の眼をもつた者はどうであるか、蟲といふ中にはいろ〳〵な蟲がありますけれども、此所で云ふ蟲とは地を匍ふ蟲のことであります。地を匍ふ蟲はどんな眼をもつて居るかといへば、たとへ御殿のやうな綺麗な所でも地を匍つて床の下から見れば、蜘蛛の巢が張つたり或は鼠の糞があつたりするやうな、さういふ汚ない所しか見えない。之を人生に持つて來たならばどうかといへば、人のあら探しをして、缺點ばかり探り出しては何かといへば妙な批評ばかりするといふ風で、まことに根性が惡い、それであるから人が成功するとそれを嫉む、互に排擠し合ふといふことになる。これは即ち蟲の眼をもつた人々のする事であるそんな者が何百萬人集まらうが、何千萬人集まらうが、決して大國家は出來る譯がない、これは非常に大事な敎訓だと思ひます。日本人は果して人の缺點を搜し合つたり成功者を嫉み、互に排擠し合つたりするいふやうな癖がないでありませうか。不幸にして私は此の點に於て日本人は非常な缺點があるといふ事を是認せざるを得ないと感ずるのであります。吾々が將來大國民として、立派な國家を形成らうとする爲には、どうしても「鳥の眼」的の大きな精神を養はなければならないのであります。此の點はどうか皆さんも若い人達に敎へられ、又若い人ばかりではない、吾々自身もさういふ點に就て大いに考へなければならないと思ふのであります。

英國民の責任觀念

また英吉利人は非常に責任觀念が强い、此の點も私は大いに感服するのでありますが、簡單に自分に最も關係のある軍人の例を取つてお話をして見ようと思ひます。軍人が戰をする時分には、必ず何かの言葉を以て軍隊を勵ますのでありますが、其の勵まし方に依つて銘々の國民性の特色が判ります。御承知の通りナポレオンが沒落をした最後の戰はウォーターローの戰でありますが、此の戰鬪に於て一方の大將は佛蘭西のナポレオン、一方の大將は英吉利のウエリントンでありました。ナポレオンはどういふ事を以て部下を勵ましたかといふと、佛蘭西人は非常に名譽を尙ぶところの國民でありますから、『汝等は佛國の名譽のために戰へ、佛國の爲に自分の身命を擲つことは自分の名譽でもあるのだ』と言つて、徹頭徹尾名譽といふことを以て部下を勵まして居ります。之に反して英吉利のウエリントンはどう言つたかといへば、『汝等は英國人として、又軍人としての責任を果せ』斯う言つたのであります。私は英語

のヂュウチーを假に責任と譯しましたが一體外國の言葉といふものはナカ〳〵完全に他國語に譯すことは出來ないものでありまして、英語のDUTYといふ語も日本語に譯すと義務とか責任とかいふことになりませうけれども、實際はそれより遙に意味が强いので、本當の意味は日本語に譯することは出來ません。ウエリントンが「英吉利人として、又英吉利の軍人としてのヂュウチイーを盡せ」と言ふた言葉は英吉利人を勵ますにはそれ以上に强い顯はし方がないのでありませう。

それから海軍の例を取つて申しますと、東郷大將は日本海の海戰に臨むに際して何と言つたかといふと、皆さんのよく御承知の通りに『皇國の興廢此の一戰に在り、各員一層奮勵努力せよ』と言はれた、日本人に取つては皇國の興廢といふことクラキ頭腦に響くものはない。ところがネルソンはトラファルガーの海戰に臨んでどういふ事を言つたかと申せば『英國は各員が其の義務を遂行せんことを望む』と言つた。我々日本人よりの感じとしては、東郷大將が言つた「皇國の興廢此の一戰に在り」云々は實に堂々として居るのに反し、ネルソンの言つた『英國はお前等が自分の責任を果すことを希望する……』は非常に調子が低いやうに聞える、併ながら英吉利人としてはそれ以上の勵ましやうはないのであります。さうしてネルソンはあの海戰に於て負傷して戰死したのでありますが、其の時に何と言つたかといへば、『神樣、有難うございました、私は自分の責任を盡しました』と言つて、滿足して靜かに目を瞑つたのであります。之によりても英吉利人のDUTYといふ事に對する熱意は、非常な强烈なものであることが判るのであります。

ストライキの挿話

私は更に自分が體驗した勞働爭議の事柄に就てお話しますが、私は或る時英吉利の造船工場に於て、軍艦の建造を監督して居つた事があります。其の際に或る一部の職工が、アト十日ばかり經つとストライキをするといふ評判が傳はりました、私共は、註文した軍艦が竣工しかゝつて居るのに今時分ストライキをされては困る、どうかそんな事はなくて呉れゝば宜いが……と思つて、日々氣を附けて居りますと、彼等の擧動は平生と少しも違つたことはない。平生と同じ時刻に出て來て、同じやうに働いて、さうして退出しても宜い時までチャント働いて歸つて行く、少しも情けることもなければ、平生と少しも違はない。然るに評判は益々高くなつて來ていよいよ明日からストライキをするといふ時になつたら、彼等はどんな擧動に出たかといへば、朝から平生の通りに仕事をして、さうして退出しても宜い時刻になつたところが、尙ほ退出しない。何をして居るかと思つて氣を附けて見ると、チャント道具の手入をして磨くべきものは磨き、油を引くべきものは油を引いて、それが終つてから泰然として退出をして行つたのであります。これは何を語るかといふと、自分等が苟くも給料を貰つて働いて居る以上は、其の給料に相當するだけの働きをしないといふことは、所謂デュウティーを盡す所以ではない、そんな卑劣な事は人間の皮を被つた者のすべきことではない、斯ういふ精神を皆有つて居るのであります。更にまた自分等の使つて居る道具は會社の道具である、其の借りて居るところの道具を不始末な事をして返すなどといふことは、自分の責任を盡す所以でない、そんな小汚ない事は出來るものではない、斯う云ふ考なのであります。これは誠に立派な考であると思ふ、ストライキなどといふ事は好ましくないのでありますけれども、する以上は正々堂々と、敢然としてやれば宜いので、給料を貰つて居ながら情けるとか、故意に仕事の妨害をするとかいふやうな、卑怯未練な事は人間としてすべきものでないと思ふ

のであります。

サボタージュは英語に無し

モウ一つ例を取つて申しますと、私は世界大戰中に艦隊の司令官として地中海に行つて居りました。私共の根據地は地中海のマルタといふ島でありましたゝ、それは英吉利の領地でありますけれども、樓んで居る者は島の土人でホントウの英吉利人ではない其所の職工が獨逸人の煽動に依つてサボタージュをしようとして、捕へられて嚴刑に處せられたといふ事が、新聞に載つて居りました。それを見た時に、私はサボタージュといふ字を知らないから英語の辭書を引いて見たが、そんな字は辭書に無い。私の參謀をして居つた中佐の人が永らく英吉利に居つた人でありますから、聞いて見ました「君はサボタージュといふ字を知つて居るか」「イヤ知りません、辭書を引いて見ませう」「僕の辭書には無いが君のを引いて見たまへ」それから見たところがやはり其の人の辭書にも無い。何だらうと思つて英吉利人に聞いたところが「サボタージュ？そんな語が英國にありますかネ」といふ樣な譯で、誰も知らない。それから佛蘭西人に聞いて見たところが、サボタージュといふのは、給料を貰つて居りながら惰けて見たり、仕事の妨害をしたりする、それがサボタージュだといふ事が漸とわかつた。要するに英吉利人といふものは、非常に責任を遂行することに重きを置いて居るから、サボタージュといふやうな汚ない事はしないので、さういふ語が英語には無いのであります。

之に就て私は日本に於ける一つの體驗があります數年前のことでありますが、私の部下に使つたことのある海軍の下士官が私の所にやつて來ました。それから私は此の話を一わたりやりまして、勞働爭議の話に就ていろ〳〵問答をしたことがあります。其の男は當時東京の電車の車掌の上役みたいな事をして居りましたが彼は「私共はサボタージュをやります」と言ふ、私は「そんな事をしてはいかんぢやないか」と言つたところが、「これは戰術でありますから仕方がありません」と言ふ。それから私は申しました、「戰略とか戰術とかいふ言葉は」軍事上の言葉として最も神聖なる言葉になつて居る、君は苟も軍人でありながら、さういふサボタージュのやうな穢らはしい汚ない事をするのに、戰術などといふ言葉を使ふのは實に成てをらんぢやないか、それはやめ給へと」申しました。其の男は大いに不興な顏をして歸りましたが、數日後に又やつて來まして「よく考へたところがどうもサボタージュなどは甚だ善くありません、今後私に關する限りモウ一切致しません」と言つた事があります。其外英國人の美點に就て御話すれば澤山ありますけれども大體だけに止めて置きます。

要するに一つの國家國民が興隆するといふには、それだけ國民に立派な素質があるから興隆するのでありまして、決して唯だ偶然に起るものではないのであります。今までお話したことに就て御考になつたならば英國が如何にして興隆したかと云ふことの一曙光が御判になるであらうと思ひます。

英國近時の衰運

然るに今日の英國はどうも昔日のやうな隆々たる勢が無い、これから私は英吉利の衰へかゝつて居る狀態に就てお話をして見ようと思ふのであります と申しましてもまだ英吉利はそれほど衰へては居る譯ではない、やはり世界中では一番豪いか、或は二番目かといふ所であります。亞米利加は今日非常に隆々たる勢でありますが、あれは世界大戰中に、他の國々が死ぬか活きるかといふ國を賭しての戰爭をやつて居る間に、亞米利加は寧ろ火事場泥棒的の稼ぎをした爲に、今日のやうな隆々たる勢を示して居るのでありまして、あれが果して堅實な繁榮であるかどうかといふ事は、まだ前途の見えない問題

であります。英吉利の如きは多年試練を經て居るのでありますから、今日は亞米利加に覇權を讓つて二番目といふ樣になつて居りますけれども、まだ〳〵世界の大國でありますから、今日英吉利は衰運に傾いて居るなどと言つたならば、英吉利人は非常に怒るでありませけれども、昔日のやうな隆々たる興隆の勢が無いといふことは、爭ふべからざる事實であります。さういふやうになつたのは何の爲であるかといふことを簡單にお話をして見ようと思ひます。

産業革命は衰運の遠因

誰でも言ふ事でありますが、英吉利が隆々として勃興したのは、何時から劃時代的に著しくなつたかと申しますと、ナポレオンとの戰に於て勝利を得たこと、それに引續いて英吉利に於て産業の革命が起つたといふ事であります。産業の革命といふ事は皆さんも御承知だらうと思ひますが、世界中でも英吉利に於て一番早く機械の發明がありました、蒸氣機關を發明したのも英吉利であり、紡績の機械とか其の他大きな機械の發明といふものは主に英吉利から起つたのであります。さうして今まで人間の手でやつて來たところの工業を、機械の力を以てやる、といふことになつて從來は想像もして居らなかつたやうな大きな工業が起つて來ました、此の點に於て英吉利は世界の先進國でありまして、他の國よりも數十年も早く大きな工業が盛んになつて大に世界の富を集めたのでありました、其の時代から世界大戰の始まる前までが英吉利の全盛期である、斯う謂はれて居りますが、これも一つの觀方でありませう。併ながら精神的に之を考へて見ますと、産業革命の起つたといふ事が、英吉利が今日以後の衰運に陷る源をなして居るとも言はれるであらうと思ひます。

何故かと申しますと、産業革命で仕事の仕方が今までと全然違つてしまつた。それまでは家庭工業で

相當に繁昌して居つたのが、大きな工業が起つた結果は家庭工業といふものは殆ど成立たなくなつてしまつた。即ち大規模の工業が起つた結果、今まで家庭的の工業に從事して居つた人々は、多く職工になつて工場に働く勞働者になつてしまつた。つまり資本家と勞働者といふものが玆にハッキリと別れて來たのであります。斯ういふやうになつて來まして、非常に國民の生活上の激變が生じて來ました、さうすると人間は食はないで生きては居られませぬから生活本位といふことになつて、生活問題が第一の大事な事柄になり、精神的の事を省みる暇の無い人が非常に澤山出來て來たのであります。即ち精神の修養、宗教の信仰といふやうなものが、此の時代からだん〳〵衰へ始めたといふことは、これは時代の然らしむる所で、寧ろ已むを得なかつたかも知れませぬ。此くして精神方面の事が疎かになつたといふ事が英吉利の衰運の一つの原因を成したと謂つても可いだらうと思ひます。

選擧制度は諸弊を産む

次は選擧制度であります、英吉利はよほど前から代議政體の國として議會政治を行なつて居るのであります。議會政治は固より良い點もありますけれども、其の缺點としましては、どうしても選擧に依つて多數を得るといふ事が大事なことでありますから政治家が多數を得る爲に自然衆愚に阿ねることゝなり公益に反する事を行ふことになり勝ちであります尤も英吉利といふ國は世界中憲政の最もよく行はれて居る國と云はれて居る丈あつて今日と雖もまだ投票の買收といふことは絶對に無いさうです。—私も英吉利の總選擧に二回ほど出會ひましたが、金を貰つて選擧するといふやうな事は絶對に聞いたことはありませんでした。今日でも買收と云ふことがないと言はれて居ります。斯樣に英吉利には買收といふ事は絶對に無いと申しますけれども、併し選擧人に

阿ねる爲にあらゆる手段を執る結果、大局から見て國家の爲にならない樣なことでも敢てすることが往々あるのであります、彼の誤まつた社會政策の如きはそれでありまして、これが今日非常な害を成して居るのであります、今其の點を少しお話をして見ようと思ひます。

其の例は澤山ありますけれども、簡單にお話を致しますと、先づ第一に金持の征伐といふ事が行はれたのであります、これは世界大戰の後に特に著しくなりました即ち戰爭の跡仕末の爲政府の財政に莫大な金が要るといふので一面に於ては金持に對して非常なる重稅を課して之を誅求し無理に之を搾取しながら他面に於ては國民の多數を占むる無產者特に勞働者に阿ねるところの不堅實なる政策が行はれたのであります。

英吉利といふ國は日本と同じやうに、否日本より以上に自給自足の出來ない國でありますから、貿易上に於ては永久的に輸入超過の國であります。日本などは、輸入超過は多い年でも二億とか三億に過ぎないのでありますけれども、英吉利では每年〳〵數十億といふ輸入超過がある。然らば如何にして此の輸入超過を決濟して居るかと申しますと、英吉利では貿易外の收入といふものが多いのでありまして、其の重なるものは何かといへば、金持が外國の事業に投資をして居る、又外國に金を貸して居る、だから外國から其の貸金の利子とか投資して居る事業の配當とかいふものが入つて來る、これが一番大きなものである。其の次は海運業であります、英吉利は非常に大きな海運國でありまして、世界の航洋船舶の約四割ばかり有つて營業して居る、其の運賃收入といふものは大變なものであります。それからモウ一つ大きなものは、英吉利の經濟界の信用が世界中で一番高かつたものでありますから、全世界の國際貿易の決濟といふものは、大部分英吉利の倫敦に於て行なはれて居つた。さうすると英吉利の銀行家は、それに依つて十數億といふやうな大きな收入を得て居つたのであります。これ等が最も大きな貿易外の收入となつて巨額の輸入超過をも樂々と決濟し得て居つたのであります。

資本は逃避し海運は衰ふ

ところが今申したやうに金持の征伐をする、それ等の金持から稅を澤山搾り取るといふことをしますから、大抵の金持は貧乏になつて仕舞ふ。又資本が自然海外に逃避することになる、即ち英吉利の資本家は外國に移住したり、或は外國に移住しないまでも、外國に於て得た金を英吉利で受取らないで外國で仕末するといふやうな事をしますから、貸金の利子や投資の配當も割合に英國に入つて來なくなつたこれが非常な打擊であります、即ち金持を征伐して之に重稅を課し貧乏人の負擔を減ずることは一寸考へると貧乏人によい樣に見へるがそんな事は決して良いものではない。資本家が貧乏になつて稅を出す力がなくなつたり、資本が逃避して仕舞つて金持から稅金を取ることが出來ない樣になります。これが英國の繁榮上一番大きな問題であらうと思ひます。

それから海運はどうかといひますと、英吉利は前にも申した通り自給自足の出來ない國でありますから、工業の原料や食料品を外國から輸入して來ますそれを主として自國の船で運搬して居る、然るに海運といふものは片荷では決して成立つものではない

幸にも英吉利は非常に石炭に富んだ國でありますから、自分の本國を出る時分には石炭を積んで行つてさうして外の國へ之を賣り、今度は穀物なり原料なりを積んで歸つて來る、斯ういふことになつて居つたから、英吉利の海運は大變都合が好かつたのであります。ところがあまりに勞働者を甘やかした結果として、勞働賃銀が非常に高くなつた、其上働く時間迄も減した爲に、能率が非常に惡くなり、其結

果は英吉利の石炭が大變高いものになつて來ましたから、外國へ行つて賣れなくなつて來た、それであるから、船舶は船腹を空にして本國を出て行かなければならぬと云ふ樣な苦境に陷り、海運もだん〳〵衰へるといふことになるのであります。

さういふ風にだん〳〵英吉利の海運も衰へ海外投資の資本の利益も入つて來ないといふことになると英吉利の財界に信用が無くなつて來る。であるから英吉利に於て世界金融の決濟をするといふ事はだん〳〵衰へて、今日は亞米利加の紐育に奪られてしまつた。即ち貿易決濟の中心市場は紐育に移つてしまつたのであります。さういふやうな事で英吉利はだん〳〵衰へて來るのは當然である。そこで英吉利は遂に、これではやり切れないといふので金の輸出禁止をしなければならなくなつた。それ以來ますます金融の中心として工合が惡くなつて、今日に至つては殆んど此大きな事業を亞米利加に取られて仕舞つた形になつて居ります。

誤れる社會政策の實例

然らば勞働者に向つてどういふやうな誤れる社會政策をやつたかといふことを、少しく申して見ますと勞働者支持の上に立つた勞働黨の內閣の時分に最も甚だしい失政をやつて居りますが失業保險の如きは其代表的のものと云へるでありませう。これは自由黨の時分によほど大きくやりだしたものでありますけれども、勞働黨の時分に更に輪をかけて、非常に澤山な給與を失業者に與へるやうになりました、これでは人間が働かなくなるのは當然だと思はれるのであります。御承知の通り昨年勞働黨の內閣が倒れましたが、それはどういふ譯で倒れたかといへばいろ〳〵な理由がありますけれども、失業保險の問題が其重なるものであります。それまでは勞働黨が多數黨でありまして、二百七十名といふやうな代議士を有つて居りました、さうして其の首領のマクドナルドといふ人が內閣總理大臣であつた。ところがマクドナルドのやうな比較的穩健な人でも、勞働黨を盛んにする爲には、多數に媚びるために失業保險を初めとしていろ〳〵誤つた社會政策を鼓吹して居つたのであります、いよ〳〵自分が政府の局に立つてやつて見ると、これではやり切れないといふので失業保險の給與金を相當大なる程度迄減らさうぢやないかといふ事になつた。之を主張したのは首相のマクドナルドと、それから大藏大臣のスノーデンの二人でありまして責任の位地に立つて見ると在野のとき鼓吹した樣な無責任な政策が行詰つたから其樣なことを申したのであります。さうすると勞働黨の方では、苟も勞働黨の首領としてそんな事を言ひ出すのは怪からぬといふので、とう〳〵自分の黨の首領を除名してしまひました。そこでマクドナルドは議會の解散を行ひ所謂國民內閣といふ擧國一致內閣を造つたのであります、前內閣當時に於ける失業保險はどんな有樣であつたかといふことを、數字に就てお話しして見ようと思ひます。

前申すやうにだん〳〵勞働者に媚びて誤れる社會政策をやつて來た結果、失業保險に依る給與金などもだん〳〵其の金額を增加して、其の當時の制度に依ると、失業者一人に就て政府は一週間に十七シリングの手當を與へなければならぬ。是は今日の爲替相場から申すと、日本の圓貨が非常に下つて居りまして一シリングは約八十錢になつて居りますから、日本の金にすると一週間に十三圓六十錢、月にすると五十七圓七十錢、是だけの金を失業者は貰へるのであります。それから妻を有つて居る者は其の上に妻の分が加はりますから、一週間に二十六シリング即ち二十圓八十錢、一ヶ月に八十九圓五十錢、それから子供を三人有つて居る者は、子供一人に付て六シリング宛加はりますから、一週間に四十四シリング、日本の金にすると三十五圓二十錢、一ヶ月には

百五十一圓四十錢といふ手當になります。失業者は妻を有ち子供を三人有つて居れば、寢て居つて毎月百五十一圓づつ貰へるといふ、實に馬鹿々々しくてお話にならないちやありませんか。これでは眞面目に働く者は無い譯であります、それだから英吉利の失業者は、月賦でいろ〳〵な贅澤品を買つたり、美味い物を食つて毎日遊んで歩いて居るといふ有樣でありました。之は無差別的な普通選擧制度の弊害でありまして政治家が愚民を瞞して多數を占めようといふ事ばかりやつて居ると、其の極はこんな事にまで立至るのであります。即ち醜い政治上の爭ひといふものは、遂に國を破滅させるものであります。そこでマクドナルドは今日やはり内閣の總理大臣でありますけれども、今は主に保守黨の政綱が行はれて居るのでありまして、此の制度を大分改めまして、失業保險のやうなものも、將來はモット減らすつもりでありませうが、今は差當り二割餘りを減じて居り、且つ働き得るのに態と業に就かない樣な者を取締る樣な措置を執つて居るそうであります。

こんな風に社會政策々々々〳〵と言ふと聞えが宜いやうでありますけれども、唯だ富豪をいぢめつけてさうして金持や資本家を無いやうにしてしまふといふことは、決して良い方法ではないのであります。また勞働者を優遇するといふ事は宜しいかも知れませんけれども、唯だ働かずに寢かして食物を與へるといふやうな事はいけないのであります。斯ういふ點をよく吾々は考へなければならない。我國に於ても今日の所謂政黨屋なる者は隨分いろ〳〵な無責任な事をやつて居ります、愚民を瞞かすことは實に至れり盡せりにやつて居りますが、あゝいふ事に惑はされてはいけないのであります。今日我が國は非常な難局に立つて居るのでありまして、お互はよほど確かりした覺悟を有たなければなりませぬ。もとより食ふ事の出來ないやうな者は救濟もしなければならないでせう、餓ゑて死ぬ者を見す〳〵死なして置く譯にはいかない、例へば北海道や青森縣の一部の如く、昨年非常な凶作であり、今年また凶作の上に非常な水害を受けて苦しんで居るといふやうな者は救濟しないで居れば餓死するでありませうから、これは何とかしてやらなければならない。併ながら多くの政黨者流などといふものは、そんなに困つて居らない者までも、自分の縣は非常に困つて居ります……といふやうな事をやたらに言ふ、さうして少しでも政府から救濟金でも取つて來れば、それが手柄だと思つて居るのであります。それであるから困らない者でもナンでも、私の所は困る〳〵と言つて、隣情團が東京あたりにやつて來る。其の代表者といふものは、窮民の金を使つて東京へやつて來て、何をして居るかといふと、トンでもない所で大いに發展をして居る、斯ういふやうな有樣であります。

人間といふものは骨節の大夫である間は、乞食みたいに手を出して、助けて下さい〳〵などといふ泣聲を揚げるべきものではない、飽まで齒を喰ひ縛つても、泣言などは云はないで、一生懸命に働かなければならない。之は自力更生の道であります。もとより今申す通り、救濟を要する者は中にはあるに違ひないけれども、少し困るからといつて人に縋りつくといふやうな、さういふ意氣地の無い者は眞の日本人ではありません、此の如き事であつては到底今日の難局を打開して行く譯にはいかないのであります。

人生意氣なかるべからず

即ち私共は今日はどうしても大いに意氣を要するのであります、其の點に於て私は日蓮聖人のことに就て申して見たいと思ひます。これは何方も承知して居られることでありますが、私は私の見る所を申し上げる次第であります。何國の人でも、一人の人間で日蓮聖人のやうに終始あんなに苦しめられた人

は滅多に無いだらうと思ふ。殴られ、蹴られるなどといふ事は日常何百遍あつたかわからない、或る時は焼打をされたり、傷つけられたり、島流しにされたり、頸の座に坐つたり、いろ〳〵な目に遭つて居られます。ところが日蓮聖人は少しも屈しない、いちめられゝばいちめられる程、ます〳〵強くなつて居られるのであります。今日の人々があゝいふ目に遭つたらどうなりませう、大概の人ならばモウへこたれてしまふでせう。又イヤに強がる者ならばキツと反抗心を起すでせう。今時の妙な赤い方の連中の如きはどうです、少し政府あたりから弾圧を受けると國家を呪ふ、さうして自分の日本の國民であるといふことは忘れてしまつて「我等の祖國ソビエット露西亞を擁護せよ」などと言ふやうになる。あれらは本當は弱虫ナンであります。日蓮聖人の如きはあれほど苦しめられても、徒らに時の爲政者を怨む様なことはなさらない。況んや日本の國を呪ふやうな事は決してなさらない。聖人は實に強い中にも素直な、まことに眞直な精神を有つて居られるのであります。あれほど苦しい目に遭ひながら國を呪はないのみならず、『我れ日本の柱とならん、日本の眼目とならん、日本の大船とならん』といふ意氣を以て自ら任じて居られる、實に崇高なる心事を表現して居られるのであります。強い斗りでは完全な人間ではない、其中に實に素直な所があつてこそ眞の勇者であります、これは日本人として大いに考へなければならない所であると思ふのであります。

我々は實に優良なる民族である、世界的に大なる使命を有する者である、困難に屈するやうな事があつては本當の日本人ではない。彼の山陰道の麒麟兒であるところの山中鹿之助の意氣の如きも、吾々は大いに模範とするに足りようと思ふ。歴史の傳へる所では彼の意氣はまことに詩的に畫かれて居る、彼は三日月に向つて、「我に七難八苦を授けたまへ」と

言つて祈つた、自分に苦勞を授けて下さい、如何なる苦勞でも私は堪へて見せますと誓つて居る。しかも彼は之を實行して居る。また熊澤蕃山の如きは

憂き事のなほ此の上に積れかし
限りある身の力ためさん

と言つて、自分の力がどれ位まで堪え得るか、其力試しに艱難が彌が上に積つて來いといふ事を希つて居る。實に其の意氣の旺盛なる事に吾々は感服せざるを得ないのであります。また　孝明天皇様の御時代には内外共非常な困難がありまして、殊に亞米利加や露西亞や、其の他の聯合國から非常な壓迫を受けました、それで或る人が　孝明天皇様にどうか陛下も　亀山上皇の例に倣つて神様にお祈りして、此の國難を打開するやうにして御願して戴きたいと申上げた際に、孝明天皇様は未だ其時期でないと宣はして斯ういふ御製を賜りました。

みな人の心のかぎりつくしてし
後こそたのめ伊勢の神風

國民がみな自分の力の限りを盡して、さうして尚ほいけなかつたならば其の時こそは神様に縋るも宜からうけれども、まだ〳〵吾々の努力が足らないから人々はみな一生懸命になれと仰せられて居るのであります。斯ういふ風でありましたから彼の當時の人心は奮ひ起つて、國威を傷つける事なくして濟んだのであります。又吾々の常に尊敬して居るところの東郷大將は、聯合艦隊を解散するに臨んで

『天は、戦はずして既に勝てる者に勝利の榮冠を授ける一勝に狎れて驕る者からは忽ち之を奪ふ、古語に謂へることあり、勝つて兜の緒を締めよ。』

と言はれて居るのであります。天は、自分で既に勝てるだけの資格のある者に勝利を授けるので、自分に勝てる資格の無い者に決して勝利を授けるものでない。しかも勝つて驕る様なことをすると直ぐに罰が當るぞだから假令今度の戰爭に勝つたからといつ

ても、決して油斷をしてはならん勝つて兜の緒を締めて、確かり覺悟をしてかゝらなければならないといふ事を調へられたのであります。

日本の難局と國民の覺悟

今や我が日本は非常な難局に在るのでありまして吾々國民はウッカリして居ることは出來ませぬ。內地の不景氣はどうでありますか、之を打開するにはどうしても自力の更生に依らなければならぬ、他人ばかり頼りにして居つては到底いけるものではありませぬ。また國外の同盟も非常に危險な狀態にあります。尤も吾々は國外の問題に關しては今日の意氣を維持して居るものとすれば、そんなに恐ろしいものとは思ひません、併し此の世の中が亂れるとか、或は戰爭になるとかといふものは實に測るべからざる事から起つて來るものでありますから、今後國際間にどんな事態が起るか豫斷が出來るものでありません、吾々は之を覺悟して居らなければなりませぬ

吾々は今日國際間の大きな波浪の中に翻弄せられて居る事を忘れてはならないのであります。

今日世界の諸大國は日本に就てどういふ眼を以つて視て居るかと申しますと、世界の大國と謂はれる國々は日本を除くほか悉く白色人種の國であります。彼等は、有色人種の中から強いものを出すといふ事を非常に嫌つて居る、日本の發展といふ事に對して非常な嫉妬心を有つて居るのであります。それであるから何か事があれば日本を壓えつけてやらうとして居る有樣は、吾々が日常見せつけられて居る通りであります、たゞ今日は利害の關係上、日本をサウ怒らせて、此の世界の不景氣の際、戰爭にでもなつたならば蜂取らずになるといふ事を變へて居るから、そんな亂暴な事を言はないだけのことでありまして實は何とかして日本をいためつけてやらうといふ考は、何の國もみな有つて居る。然らば世界の小國はどうかと申しますと、小さい國は彼等の

情として弱い者に味方をしたがる、即ち支那の味方をしたがつて居ります。さうして又支那が無理だといふことは、今日は彼等も大概知つて居るのでありますけれども、併し彼等は自分の國の立場を考へて居る。即ち今日、強い國から弱い國が虐められるのを、默つて看過して置くといふと、他日自分等が隣りの強國から虐められるやうな事があつた際にも亦日本が支那をいぢめた例に依つて看過されるに違ひない。それは困るといふ所から、自分は日本に對つて決して惡意を有つて居らない者でも支那の樣な運命が他日自分の方に運り合せが來ては困るといふので、先づ弱い者の味方をしよう、斯ういふ考を有つて居る者が多數なのであります。であるから今日は決して認識不足といふやうな言葉を以て單純に解釋する譯には行かないのであります。

斯樣に今日は吾々は大きい國からも、小さい國からも、決して好意を以て迎へられては居やしない。何か日本に缺點があれば彼等は總掛りで日本を壓迫に來るに違ひない。であるから吾々は飽までも頑張つて弱點を見せないやうにしなければならぬ。勿論我當局者に於ても決して樂觀して油斷して居るのではない、今日軍事工業は非常な勢を以てやつて居る、民間でも兵器の部分品を造る所ではみな忙しくやつて居るそれは諸君も御承知の通りでありまして其事は新聞にも出て居るし、みな承知して居る筈であります。さういふやうに政府としても、或は戰爭にでもなる事があるかも知れぬと思つて準備をして居る際にあたりまして國民がそんな氣にならないで唯だ惰眠を貪つて、奮發心を起さないで少し苦しいからといつてむやみに手を出すといふやうな事であつては、日本の前途はどうなりませうか甚だ心細いのであります、大に奮發しなければなりません。

大なる日本！ 小なる聯盟！ 大なる日本！ 小なる亞米利加！

吾々は確かりして居さへすれば、ナニも恐るべきものはない。往昔、蒙古と日本との間の緊張した事態の起る前、日蓮聖人は誰よりも先に蒙古來の事を豫言されて居ります。日本では誰もまだ蒙古の難があるであらうといふやうな事を考へて居らない時分から、日蓮聖人は非常に注意して警告を與へられたその點に於ては彼はエライ豫言者であつたのであります。さうして警告をする際には、大なる蒙古が小なる日本に向つて攻めて來るから、大いに氣をつけなければならないといふ事を警めて居られます。然るにだん〳〵事態が切迫して、いよ〳〵蒙古の大軍が攻めて來るといふ事がわかつた際には、日蓮聖人はそんな事は言はない、小蒙古が大日本國に押寄せて來る……といつて、非常な意氣と自信を示して居られます。今日吾々は確乎たる決心を以て奮勵努力したならば、何も恐れるものは無い、大なる日本、小なる亞米利加…、大なる日本、小なる聯盟……といふやうに、日蓮聖人の如き意氣を以て國民が起つたならば、此の國難の打開といふ事も決して出來ないことはないと思ふのであります。

斯ういふ譯でありますから、日本國民が本當に決心をして擧國一致の態度を示すべきでありまして、さうすれば彼等は決して日本に對つて事を構へて來るものではない。これは國と國の間でも、或は動物と動物の間でも、有機體のものはすべて同じ事であります。犬などが吠えついた時に、こちらが睨み返して向つて行けば、犬の方で逃げる、こちらが弱い腰を見せて逃げ出すと、犬の方が追かけて來るものです。それと同じやうに、國と國との間でも、こちらが決然たる態度を以て、挺子でも棒でも動かないといふ決心をすれば、他の國は決して向つて來るものではありませぬ。此の如き決心の下に國民は一致團結、本當に自分の力を養つて、勇往邁進事に當つたならば、今日の難局も打開されて、將來日本はます〳〵隆盛に赴くことが出來るであらうと思ひます

私のお話いたした事は主に英國の例をとつて申上げたのでありますが、最初に申す通り、英國と日本とはいろ〳〵の點に於て相似た所が多いのですから、私の御話は今日の重大なる時局に處して、お互ひ國民としての決心覺悟を固める上に、多少の御參考になる所があつたとしますれば、甚だ滿足に堪へない次第であります。之を以て今晩のお話を終ります。（拍手）

教報

本團活動誌

十月二十六日 午後七時折柄の强風を冒して三條線堀の街頭に立つ。時頭礦部滿事氏現はれ「國家の安危は政道の直否にあり、佛法の邪正は經文の明鏡による」の聖語を以て、現代相を擬模に論じ彌々正法興隆せざる可からずと協力を促進す。次に小西日喜師は「法華の行者の折伏の協はぬ事はある可からず」に就て正々堂々と大聲を以て今日多難に處し正しき折伏の下に國家の發展を祈れと、適例を以て夢長舌を振はれた。續いて本郷常次郎氏は「日蓮主義の顯行」と題し信仰とは如何やうにすべきかを談述され、氏は先頃のカトリック教徒の反國體行爲に就て左の如く輿論を喚起された。

上智大學初め外二中學の三校が宗教的立場から(一)御眞影を奉體せず(二)國旗を掲揚せず乃至生徒に對し、明治神宮、伊勢大廟、靖國神社等の參拜を差し止め、我國體と全然背反せる教育を行つて居るさうで、配屬將校は非常に憤慨し、陸軍省に報告したところ、陸軍省でも重大視し調査したところ事實それなので、近く斷然右三校より配屬將校を引揚げしめ、これ等學校卒業生に幹部候補生の資格を喪失せしめる方針を決定し、目下文部省と交渉を行つて居るさうであるが、文部省では極度に狼狽し、寧ろ反對の意を表して居るとか。

右の報道を若し事實なりとせば陸軍省の取れる態度は當然すぎる程の當然である。

由來基督教系の學校若くは信徒には、これまで屢々さるやうな事實があつたことを、吾々は實に遺憾とするのであつた。如何に信教は自由なりとも、安寧秩序を妨げず、臣民たるの義務に背かざる限に於て信教の自由は許されて居るのである。彼等學校及び生徒の取れる態度が果して社會の安寧秩序を妨げざるか、臣民たる義務に背かざるか(一)(二)は云はずもがな伊勢大廟、明治神宮不參拜は申すも畏し、靖國神社と雖も國家の爲生命を賭したる幾多先輩同胞の尊き生靈を祀れる神域にあらずや、畏くも陛下に於かせられてもまた親しく御參禮あらせらるる聖境に非ざるか。彼等學校生徒にして外國人なれば則ち止む、苟も吾が大日本國民たらば、たとひ學校當局に於て制止するとも、自ら進んで參拜すべき當然の義務あるに非ずや。彼等が今日安閑として通學し得るは　上聖上の御威德に因るは云ふまでもなく、又是等幾多忠勇なる犧牲者の賜にあるにあらずや。それをしも拝へずして、參拜を拒否するとは何事ぞ、汝等我國體

の尊嚴、國家の恩惠に感謝するの念なくんば宜しく我が大日本帝國を去りて各好める外國に歸化すべし。吾等は汝等を我同胞の一人として俱に天を戴くを嘆ず。然も文部省が狽狽寧ろ反對の意見を有するとは實に驚かざるを得ず鳩山文相曩日地方長官會議に於て「要は我が國體觀念を明徴にし國民精神を揚揚すると共に醇正なる宗教的信念を治く民衆の心裏に扶植するに在り云々」と宣言せられしにあらずや、宜しく勇斷學校當局を調誡し乃至閉鎖し生徒を轉學すべし、何の恐るゝ所かある何の逡巡する所やある。

要するに思想の惡化は斯かる邊より出づ是をしも一小事として輕々に看過せば遂には猛火炎々として施すに詮なく、袖手傍觀するの愚を呈するに至らん。嗚呼危いかな、恐るべきかな。これ敢て余の一私言に非ず、滿天下同胞の聲、吾が大日本帝國臣民の畢生の叫びである云々。

最後に山口智光師閉會を宣して、十時半各自來援者に感謝しつゝ散會した。

福島に於ける統一團布教活動の記

福島に於ける日蓮主義信仰復活の運動は次第に勢力を得來り、先に七月我が統一團々旗を奉じて本部より布教に赴いた後三閲月、十月二十八日再び我等は此地に遊說する事と爲つた。朝九時二十分先發小西、磯部の二講師上野を發ち、三時頃迎へられて中村女史の家に着し種々の話を交す、五時河合講師も着され一行整ふ、六時過ぎ福島ビルヂング三階を會場として、高商學生岩城學君の開會の辭に次いで同校學生日蓮聖人讃仰會の少壯研究家平井君熱辯を振るつて日蓮聖人の高潔剛毅の人格より聖人の正々堂々の主張たる佛法の正系教義更に愛國又憂國的熱情及び思想を慨說さる、我等は其の一脈の氣魄の籠れるを見て一種の感に打たれざるを得なかつた。是れ蓋し矢張り日蓮聖人のかの澎湃脈々たる天地一貫の大精神がまた同君の心奥にこだまして居るからであらうか。續いて河合講師は「佛陀の信仰」と題して、今後佛教の教義思想信仰の體系的講述の最初に當り今日先づ釋尊の傳記を陳べ以て佛陀の人格を說かんとて、下天、誕生、納妃四門出遊より悲壯崇高なる出家の事蹟に及び、遠く三千年の古を宛も眼底に歷々として指き出しつゝある如く、聲勃たる佛陀釋迦牟尼敬慕欣仰の熱情を罩めて話され、以て苟くも佛教の信仰は佛陀の信仰を以て究極と爲す、而もその佛陀は現實人類の地上に親しく足跡を印せられたる我が生身の佛陀釋迦世尊の御身を通して永遠常住實在の理想的大人格者を思念渴仰するに在り、是れ法華經本佛顯本の日蓮大聖人の眞主張なり釋尊即絕對の無窮の教主救主たり本佛なりとの大教義を述べられた次に小西講師は、「苦難より歡び入つて」の題下に、佛祖の金言を基として人は造むならば、そこに無上の歡びを持つ。吾等は眞理に根本を置かずして努力せば必ず失敗を招かん。成功は人格を鍛練し來るより外に最高の理想はない、而かも世人は往々其目的と手段とを混線するは注意すべきであると、それより『諸法從本來　常自寂滅相　佛子行道已　未來得作佛』の金文により縷述され、幸福なる生活に入るには第一感謝、第二信賴、第三奉仕の三を以て例證し、人生指導原理は法華經に說く父子關係、大慈大悲に出づべきを明かされ、この大宇宙を一家庭と見て自然法と道德法の根本無二なることより佛教信仰の三寶觀に及んで、信仰は苦痛の人生に於ても歡喜の心に炎ゆるなりと說かれた。

最後に磯部講師は、「佛教徒の見たる非常時」の演題を掲げて、今や我が國家非常の時、見よ一國の宰相老齋藤子自ら帝都の中央日比谷の原頭に出馬し熱辯を振るつて國難の打開を叫び自力更生を說き、政治經濟軍備國防の諸件ひとしく皇國民人の擧國一致の覺醒奮鬪を望まるゝに非ずや、さて今我が所見抑も如何、護國の大事は人皆之を知る、然乍ら其の方法に於て遺憾無きや否や、愛國には、武力的と經濟的と思想的とあり、而て國民精神の統一は思想の統一就中一大德教の確立に俟つ、此の一大德教とは何ぞ、神儒佛三道一貫の精神思想即ち然り、是れ我が千數百年の皇謨たり、はた又我が民族の國民精神なり、否又神武建國の當初『慶びを積み暉きを重ね正しきを養ひ、天業を恢弘して天下に光宅し八紘を蓋うて宇と爲さむ』大理想の發展的成果なり近くは明治大帝王政維新の大猷を傳へ給へる今上の聖天子の御謀なり、あゝ神ながらの道に淵源して堯舜文武の德を容れ更に佛法の轉輪聖王の恩威を加へたる萬世一系萬代不易の皇國の我が民、此の國難來の非常時に當つて須く祖國の道に還り祖國の教に還り、三道一貫の大精神に目覺めて護國の礎と爲り、所謂『日は東より出でゝ西を照す』國士日蓮の立正安國皆歸妙法の使命の爲に竭されむ事を望むと聽者の心琴に觸れて降壇さる。玆に當地の先覺岩井蕎氏、閉會の辭を宣して終り、直ちに中村女史の邸に有志を集めて小西導師の下に法要を勤め、終つて座談會を開く、共產主義の事、社會運動の事現代資本主義組織の事、其の改造意見、自力と他力との事等色々問題出で、三講師各之に答へ、佛法は凡て世間の考より今一段深く立入つて考察する所に始まるとて、社會組織の問題と布施の眞意義、平等に即する差別の當相が人生世間の眞理なり、啻に一個有心靈の人格のみならず社會も國家もひとしく眞如海中の事相たるなり、此の差別界裡にあつて調和を求めんには、結局外的制度のみならず、人間心情の理性化に存す。若し布施を以て立論せば、天下一切の人倫道德布施ならざるなし、其の種々面には即ち食施巧施法施無畏施等あり。而て其の根本は慈悲と報恩の感情にあり、此の感情は自己及び社會乃至は天地との根本的不可分離の存在に關する報本反始の念即ち所謂反省的判斷に伴ふ理性感情なり、此の如き深き意味に於ける慈悲同情の觀念は社會經緯の根本なり『彼を見ること我を見るが如くならん』と云ひ、『同體の慈悲を激發せよ』と云ひ、又實に「佛法とは慈悲宗なり」と釋尊は說かる、此の考が根本と爲りて、六波羅密の最初にも、又五戒十戒諸淸淨戒の初にも皆布施及び不殺生を置く不殺生と云ふも衆生の生命身體財產仕事に對する不殺無傷害、無障碍の三義を兼ねるものの之をアヒンサー(不殺生)といふなり、此の觀念心情、此れ一切の諸戒一切の道德の根本なれば最初にあるなり、此の最高發揮は法華壽量の久遠の不殺生戒として、本佛と衆生の佛性の開顯といふ無量壽命の大布施にあり、大增益にあり、所謂「如來は是れ一切衆生の大施主なり、汝等亦當に如來の法を學すべし慳悋を生ずること勿れ(嘱累品)」とは是なり、布施の心は即ち不殺生、二者別ならず、由來人格の權利と云ひ又その人性自然の基礎としての生存の本能と云ふも、「彼が取らん」とするの情は「我れが遣らじ」とするの情なり「我れが取らん」とするの心は「彼が遣るまじ」とするの心なり。此の心此の情是れ同一物の兩面なるのみ、之兩

者に共通の心地なり。一度び這般の消息を徹觀する時、彼我の別にとゞこほらざる融通一貫の善遍の活理に會し、所謂渙然氷釋するに至る「私己を既すれば則ち人情は天下の至理なるを見る」是れ自然の本能の理性化として、人格の道德的自覺の端緒なる處、此處に釋然として仁惠の情慈悲の心は涌出するに至る、ものを惠むは即ち恩惠にして、恩は直ちに報恩を生み、此の報恩は又翻つて其の報恩を促し、かくして遍還周流し周旋往返して無窮にやまず、生命觀即布施觀なり、生命觀即慈悲觀なり、生命觀即報恩觀なり、天地三寶の恩、國王の恩父母の恩衆生の恩等或は師匠の恩夫婦の恩等四恩六恩十恩の理此の念是れ以て世間安立の大地たるなり、是皆恩なり是皆慈悲なり、是皆布施なり、是皆温かなる因緣の血を通はす處、一として不仁なるの境なし、所謂仁はものゝ始を成し義はものゝ終を成す、「生即愛」の哲理「生即恩」の活釋こゝに立つ。然も能施受施自他の差別にとゞこほらざる豁然玲瓏無所著無所得の心境が大乘に所謂「空、無相、無願の三三昧」の菩薩の心地まさに是に外ならず、所謂慈悲心是れ如來室に居り、忍辱是れ如來衣を著し、一切法空是れ如來座に坐して衆生を濟度せん法華の法師三軌の教誡、自行化他の修行は是なり、佛法は是の如く慈悲觀因緣觀報恩觀等を敎へて社會を温かにし人情を陶冶し浮化し菩提化するものなり現代非常時と云ひ社會改造の要多面に亘つて、存するも、其の當面一時の敎化と同時に恒久普遍の敎化は常に必要なり、世態人心の變社會の波瀾は世間相常住の理りに洩れず、達人はおもむろに大所より達觀するを要す、而て以て生民塗炭の苦みを救ふには懲ゆるが如き信仰の心地然り大乘菩薩的心地を要するなり、信仰の自力他力と云ふも佛力と信力との自他冥合する所に、凡てものゝ發生成就はあるなり、右は滿足左は進趣一歩は安住一歩は向上する所、此處に每に本佛に擁護せられ居る自己及社會の信仰生活と化他救濟改善向上の靈化活動あるなり、かの凡ての事を簡單なる一語に片附けて、深密微妙の內容を探求知得せざるが如きはなまけ者のする事なり。自力他力の事も詳しく言はゞ、久遠無始劫來の本佛釋尊の「佛力」と、此の佛陀の功德の敎法たる妙法の「法力」と、この妙法華經なる人生處世活動の敎科書乃至救濟の福音書に從つて、此の功德の源泉たる佛陀と妙法とを信受奉行する我が「信力」との「三力合成」に由つて我等の信仰は發起し我等の向上永遠の生活は完成遂行さるゝなり。然も我が信念の內證極地としては、即ち所謂「無始本有の本佛釋尊の本有の慈悲より無始の衆生濟度の化他行として我等に回施せられ（回向し布施し惠まれ）たる所の我等の信念なり、即ち救主本佛每自作是念の大悲願より回向せられたる我等の信念なり深自慶幸獲大善利の信念なりと了知せよ然らずんば當家信行の旨致を滅沒するに至らん、されば即ち無始本佛の絕對の慈悲力佛力誓願力に乘托する所に我が信念の最終依止處最深秘處は存するものなる事を信ぜよ。聞け大聖人が「我等衆生は五百塵點劫よりこのかた敎主釋尊の愛子なり」と、あゝ此の大信念に感奮する者何ぞ一分の微力たりとも法のため國のため家庭のため人のために竭さゞらんや等々と示敎利喜の言葉は諄々として盡きなかつたが時ももはや十二時を過ぎたので座談會も終る事になつた。

さて然るに此日福島ビルヂングにて

公開講演の前、突如磯部講師の令息急死の報來つたのであるが、同氏は徐ろに其の電報を一讀微笑したまゝ靜かに會場に赴き、講演を濟まし更に此の座談會に臨まれたのであつた。「講演說法に遊行するは、軍人が戰場に馳驅すると同じである、是が我等法戰の職責である」と同氏は微言に語つて居られた同氏を知る者殊に福島の信徒はひとしかに感嘆の聲を放つて居たのであつた。同氏は尙翌日も留まつて說かんとせられたが、同志の勸めもあり遂に小西講師と共に、座談會の最中十一時過の列車に搭じて歸東せられた、あゝ同氏の心中察するに餘りあり、歸途暗夜の寂漠を突いて進む車中の感慨如何であつたらうか、我等は只深息を寄せてまさに師が法戰の功德を捧ぐべき亡き愛子の菩提を祈る……

翌廿九日獨りふみとゞまれる河合講師は、中村女史の宅に金澤女史等と共に尙も種々の法話に耽り、其時金澤女史の疑問に答へて、我等は佛樣に全く打ち込んで信賴しつゝも同時に、否信賴するが故に尙更我等は飽く迄も努力精進奮鬪するもの、やつて〳〵やりまくるもの也、即ち法華經的精神日蓮主義信仰は、佛陀の壽命尊嚴神秘智慧慈悲功德神通同化救濟力の絕對的發揮として本佛論あり、同時に之に對應して人間の威德力用の絕對的發揮として佛性活現の菩薩行論あり、二者並び行はれて絕對無限の發揚を唱道するものなりと說明せられ、やがて一同相携へて午後一時より市の近郊清水村なる福島高商の日蓮聖人鐵仰會の座談會に臨む岩城君開會の辭を述べ、來春の卒業近きに際して愈に後事を後輩に托すべく種々の注意を述べ、岩井金澤中村三氏等市の信仰家先輩諸氏と提携協力されて進まれむ事を促された。それより茶菓を喫しつゝ打ち寛いで種々の質問又相談に移り、途中伊藤校長の令夫人も見え河合講師は初、其等の質問に答へつゝ次第に氣焰を擧げゆき、中村女史が一念三千の說明を彌勒菩薩として學生等大衆に代りて乞はるゝや應答熱を帶び來り、所謂文字の法華經より人格の法華經へ、紙墨の經卷より靈肉の經卷へ色讀法華經の體驗實踐所謂法界の正宗分本法法華經の人格的流通活動へ日蓮聖人の知法思國敬天愛民の大活動豫言の警告國難の絕叫、佛子の本分菩薩の願業白熱の信仰忍苦の生涯一片耿々たる上求菩提下化衆生の至心哀情よりひるがへつて法界本有の大人格者本佛の實在を思念悄愴しては暮れ行く空の雲の色有明方の月の光にも宇宙的審美の情操を流露告白せられたる至醇至美の宗敎心の全象、その種々面種々相を縱橫に說かれ、かくて來月よりは同講師を聘して每月法華經の要文講義を依賴し、更に岩城君が讀經唱題等勤行の我が靈性の琴線に觸るゝ所あるを說いて學生諸君に之を勸めて河合導師の下に一座の法要を成す。時に四時半の頃であつた。會は之にて終り、夕の暮の落ち來る五時四十分福島驛頭金澤中村兩女史に送られて此地を離す、發車間際に來られし岩城君に河合氏は尙も一念三千の事を說いて、挨拶を交す間もなく汽車が動き出すも尙止められなかつた……同氏はそれより郡山に篤信の士五十嵐治郎左衛門氏を訪ねて信仰の數談盡きず、就中五十嵐氏が書面軸物御本尊等を頂きつゝも遂に拜眉の機を得ざりし聖應院本多日生上人の御臨終の有樣を委細に物語り、更に上人の遺命たる我が統一團の本分使命を談じ一夜の宿を藉りて明くる三十日厚きもてなしを受けて東都に歸る。ひるがへ

つて思ふ、統一團の地方的發展たる、未だ本部會館も整はざるに既に福島奥州の地に發祥し、況んや此の地は是れ日蓮大士法統の正脈を提げて起ちし日什正師老雄の生誕發心捨邪歸正の靈香薫ずる處、あゝ老師古稀に垂んとする身を以て尚一念決定正法の信を以て孤軍翩然大聖の遺教を探り古賢の遺法を尋ね國家諫曉を以て自ら任じては數百里の長途を往復して幾度か上洛し或は天朝に或は幕府に盛に法鼓を撃つて法統擁護の一大事に盡瘁し、遂に終焉の地をまた此故山に致す、我が統一團は是れ日蓮教學の純乎として純なる正統を以て自ら任じ其の第一矢を今此地に放つまた奇縁奇瑞たるなからんや　聊か以て老師の菩提を慰むるに足らん乎あゝ感奮興起せずんばあらじ　又せずんばあらじ　冀くは正法正義の我が正師先づ此地の庶民にはた又我等に永く冥顯の靈應あらせ給へと云。

南無妙法蓮華經　（河合生記）

京都顯本兒童會秋の大會

十月十五日（土）午後五時半より妙滿寺講堂に於て開催、顯兒會はこの秋で創立十三週年を迎へたのである。

前夜來の雨がやゝ衰へたとはいへまだそぼそぼと降つてゐた。けれど待ち構へてゐた子どもたちは雨を冒して續々と集まつてきた。そして第一部の式典の始まる頃には堂に溢れたものが廊下にぎつしり立ち並んでゐた程であつた。

五時半から第一部の式典が山内の有田、土持、近津三師によつて擧げられた。

開會の辭　司會者　土持良逢師

献華燒香、禮拜、お誓ひ、君が代、たちわたる

訓　話　有田宏道師

「佛の子供」の合唱に第一部を終つて六時半より第二部に移る。まづ

所感　本山部長　川崎英麟師

終つて童謡の合唱、かはいい幼年部兒童のお遊戯「お母ちやま」「桃太郎さん」を始め「でん〳〵虫」「かたふくぼ」「獅子舞」「山雀太夫」「日和傘」「オヴア・ビア」「花嫁人形」「あした」「荒城の月」及び「證城寺の狸囃」「兎のダンス」「水兵さん」等の童謡舞踊、田邊正男氏の童話「楠木正成」、その他劇「馬わすびと」「三匹の子熊さん」「烏のかしら」「鬼の面」「俄人形」「こゝはお國を何百里」等あり、大盛況裡に九時半閉會した。

少しむし暑い晩であつた上、滿員のいきれで中の兒童たちは隨分苦しさうであつたが默つて最後までおかず見てゐた。殊に童謡舞踊は五彩のライトに點出されて美しい仙女の踊りを見るやうなあやしい感銘を見るものに與へたやうであつた。

終了後も會員の兒童たちは――彼等はみんな出演したのであるが――まだ藝術的な興奮に醉つたやうな目をしながら、殘つてきれいに掃除をし會場をかたづけてそして歸つていつた。

兒童劇『秋』放送のこと

十月二十二日午後六時から顯兒會員によつて京都放送局より兒童劇「秋」の放送がなされた。從來行はれてゐる俗惡低級な傾向を排し純藝術的な兒童劇を子どもたちに與へたいといふこの作者の音響を幾分でも演出し得たものとみえて多くの識者から好意と激勵が與へられた。

二本松教信

十月五日午後二時二十一分二本松驛通過にて仙臺野砲兵佐々木榮一氏東京衛戍病院を退院し郷里に歸る因つて出迎ふ。

同　六日午後二時二十一分仙臺部隊の遺骨九基二本松驛を通過す因つて出迎へ讀經す。

同　七同午後四時三十分若松部隊の遺骨五基二本松驛通過にて故郷に向ふ因つて出迎へ讀經す。

同　八日午前九時五十二分戰死者二基の遺骨二本松驛を通過す因つて出迎へ讀經す。

同　午前十時二本松町出身歩兵伍長今江長之助氏の葬式にて弔辭を捧ぐ。

同　十一日夜於蓮華寺宗祖龍口御法難會修行

龍口御法難會に就て　中嶋元道師

同　十三日貧困救濟事業二本松佛教不染會托鉢修行

同　十八日午前十時安達郡聯合招魂祭修行

同　二十二日午前九時五十二分歩兵伍長八巻盛壽氏若松衛戍病院を退院二本松驛を通過し郷里に向ふ因つて出迎ふ。

同　二十五日午後二時二十一分憲兵伍長小野善右衛門氏の遺骨二本松驛を通過す因つて出迎ひ讀經す。

山形縣堀金實藏寺御會式

十一月九日　御會式の法要を皮修樂奏し例年の通り檀徒子弟達三十九人　唱題錄（佛陀篇三德章）各分擔し　御實前にて謹讀致しました　次に講演に移り

開會辭　五十嵐長藏氏

宗祖日蓮聖人ハ何ゼ念佛無間ト申サレマシタカ　山主　村田　義本師

次に蓄音器にて　情野源藏　情野清次郎

兩氏寄贈の日本國民歌　筑前琵琶　肉彈三勇士　童謡　お伽五十音等々を奏演せしめ、供養のお餅で滿腹午後十時散會した。

御　注　意

御轉居又は市制變更の爲め町名番地改正の方は至急御一報願ます。舊御住所にて發送の場合は遲延又は不能となり、各方面へ色々の手數を煩はすことになります。

統一定價	
一冊	金貳拾錢　送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢　送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢　送料共

統一廣告料

表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾五圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓

前金之事

昭和七年十一月廿四日印刷納本
昭和七年十二月一日發行　（第四百五十三號）

神奈川縣横濱市磯子區磯子町廣地一四八

編輯兼發行人　磯部滿事

印刷人　鈴木日雄

印刷所　東京市品川區南品川二丁目百八十一番地　都印刷所　電話高輪六〇二四番

發行所　東京市品川區南品川二丁目四百十二番地　財團法人統一團　振替東京九四二〇番

不許複製

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ